

Special Conversation

新春特別対談

大分大学名誉博士称号受称記念

慈善事業は『社会への恩返し』。

第一交通産業株式会社

代表取締役
創業者会長

黒土 くろつち

始氏 はじめ



株式会社福岡銀行

取締役頭取

柴戸 しばと
隆成 たかしげ





1.大分県中津市の黒土会長生誕の家／2.第一タクシー創業の地／3.1962年5月頃の車庫／4.1965年頃の車庫／5.1970年頃の車庫／6.AVM無線配車室

柴戸頭取（以下、柴戸）

2019年9月、黒

土会長の永年にわたる社会貢献を称え、母校である大分大学から名誉博士称号を受称されました。この度はまことにおめでとうござい
ます。大分大学の名誉博士称号は、2006
年度にノーベル医学生理学賞を受賞したロビ
ン・ウォーレン西オーストラリア大学名誉教授
と、バリー・マッシュル同大学教授のオーストラ
リア人2人に授与されて以来の3人目で、日
本人としては初めてということですよ。

黒土創業者会長（以下、黒土）

大学から授

与のお話をいただいた時は、突然のことで驚
きましたが、これまでの社業を通じた社会への
貢献が認められたとのことで、名誉なこと
この上なく思ってお受けすることにしました。
北野正剛学長から名誉博士記とメダルをいた
だき、この上ない名誉でまるで夢のようでした。
この称号に恥じないよう、これからも社会

貢献を続けてまいります。

私は1922年に大分県下毛郡尾紀村（現
在中津市）で生まれ、1941年に「商業を
学んで商人になったらどうか」という父・勘吉
の言葉もあり、大分大学経済学部的前身であ
る大分高等商業学校に進学しました。ここで
好きな勉強に励み、将来は地元の銀行か県庁
に勤めたいと考えていましたが、非常に残念で
はありましたが中退し、1942年の召集令
状により、中国の天津に配属されました。

戦後、中国から帰国することになったのです
が、約1年2ヶ月の抑留生活を余儀なくされ
ることに。その間、敗戦からの復興に自分がで
きることにについて考えを巡らしました。この
時、学校で世界経済に興味を持ち、第1次世
界大戦後のドイツ経済の混乱などを学んでい
たため、「日本でもインフレが起きる」と見通
しを立てたのです。中国から故郷の母・イチに
手紙を送り、売れる物はすべて売って、いつでも



1.本社ビル／2.FCV／3.一般社団法人 第一交通産業記念館

換金できる物に替えておくように伝えたので
す。ほどなくインフレとなりますが、このこと
で打撃を受けることは回避できたのです。今
の第一交通産業があるのも、この時母校で学
んだことのおかげだと思っています。

柴戸 1960年にタクシー5台から今の

前身となる第一タクシーを創業されましたが、
それ以前にも事業を興されていたのですか。

黒土 帰国後にまず着手したのは物価統制
の規制外であった加工品、たくあんの販売で
す。その他にもセメントやチリ紙、貴重だった
芋飴、砂糖の卸売り、運送業、トラックの販売
などを行いました。朝鮮戦争の特需もあって
事業は順調に拡大していましたが、そのう
ちに特需は収束し、さらにエネルギー革命で石
炭産業が傾いたことで九州経済は失速し、取
引先から売掛金の回収ができなくなって、私の
事業も閉じることになってしまいました。

今後をどうするかと思案で暮れていた時、
当時、東急グループを率いていた五島慶太氏
からの助言もあり、大衆向けの現金商売をす
ることにしました。それがタクシー事業だった
のです。当時の小倉市（現在の北九州市小倉
北区）に小さな社屋を構え、5台のタクシーを

購入し、事業に乗り出しました。タクシー事業
を始めるにあたってどのようなタクシー会社
を目指すか。私自身は、今日まで運転免許す
ら取得しておりません。ですから、常に利用者
側として、利用者の立場に立って、お客さま本
位を掲げたタクシー会社を目指すことにした
のです。

柴戸 どのような企業努力を重ねられて、5
台から始めたタクシー事業を現在の8,400
台を超える日本一のタクシー保有会社にまで
成長されたのでしょうか。

黒土 創業するとすぐに、タクシー無線を北
九州のどの会社よりも早く導入しました。当
時は無線も一般的には普及しておらず、一旦
街に流し営業に出たタクシーは、営業所にお
得意様から電話があってもすぐには連絡がつ
かず、必然的に営業所に何台かのタクシーが

常時待機する必要があることから、実に非効率だったのです。無線を全車に装着したことで、効率的な配車が可能になりました。

柴戸 当時はまだ一般的ではなかった技術を

いち早く取り入れられたのですね。現在はIT化・デジタル化がかなりのスピードで進んでいます。黒土会長は自社開発のスマホアプリ「モタク」や、配車サービス「D i D i」を九州で最初に導入されました。金融業界でも同様にデジタル化の進展は凄まじく、そのためFFGでは2016年にグループ企業の「iBankマーケティング」を傘下に立ち上げ、またモバイル専門銀行の「みんなの銀行」の開業に向けた準備を現在進めているところです。

また、保有台数が日本一となられ、規模のメリットを活かして人口が減少する地方の交通基盤を守る取り組みが続けられています。



▲対談風景

FFGも、地域に寄り添って役割を果たすという点で同じで、人口減少が進む長崎で2020年10月に親和銀行と十八銀行の合併を予定しており、地域の金融システムの安定化を図り、長崎県経済を活性化する取り組みを本格化しています。

黒土 私の元にM&Aの提案がはじめて寄せられたのは1964年のことです。規制が壁となり、各地域のタクシীর総数を増やすことが自由にできない時代でしたので、M&Aによって規模を拡大していくことになりました。

併せて、総合生活産業グループとして分譲マンションや飲食ビル、戸建て住宅などの不動産事業、医療・介護など幅広い分野に加え、中国、韓国、ミャンマー、インドに海外進出して事業を展開しています。また、2004年に沖縄県的那覇バス、2006年に琉球バスをグループ化し、これを皮切りにまちづくりでの

再開発などにも参画しました。2019年は沖縄進出から15周年を迎え、船舶事業にも参入しましたが、沖縄での事業の今後が楽しみです。

柴戸 近年は社会貢献にも尽力され、慈善事業で多くの表彰を受けておられますね。

黒土 これまでを振り返ると、「努力は天才に勝る」という信念でがむしゃらに働いてきたと思います。と同時に、これまで会社を育んでくれた社会に対し、恩返しをしたいと思います。うになりました。そこで、2017年の九州北部豪雨で被災した大分県の復興の一助になればとの思いで支援をはじめ、さらに福岡県や北九州市、朝倉市などへの支援を続けていきます。

また2018年4月には北九州市小倉北区足立の私邸の一部を改装して「第一交通



名誉博士の称号を受けた黒土会長(左)と大分大学北野学長

産業記念館」を開館しました。この記念館では人・地域社会・時代を見つめながら、明日の快適生活環境を創造してきた当社の歴史と歩みをご紹介します。併せて当社が今まで社業を発展できたことへの感謝と私の経営理念を後世に伝え残すために、三つの拝殿を配した「第一協和院」を建立いたしました。



▲2019年12月10日(火)に開催された祝賀会の様子

■ 第一交通産業株式会社

- 創 業: 1960年
- 設 立: 1964年
- 所 在 地: 北九州市小倉北区
- 資 本 金: 20億2,755万円
- 従 業 員: 約15,000名(グループ合算)
- 事業内容: タクシー事業、バス事業、
不動産分譲・賃貸事業、自動車関連事業
介護・医療事業ほか
- 事業拠点: (本 社) 北九州市小倉北区
(営業所) 国内34都道府県
ミャンマー、インド、中国、韓国
- 取 引 店: 福岡銀行 北九州営業部

当社社員はもとより、社外の方にまで見学に訪れていただいています。先日も母校である大分大学の学生らが見学に訪れてくれました。学問春には母校での講義も予定しています。学問とともに、実務を知ること重要なことです。講義を通じて私の体験してきた、生きた経済を、後世に伝え残すことができればと思っています。